一般財団法人新村出記念財団報
37
令和5年(2023年)7月
京都市北区小山中溝町19
一般財団法人新村出記念財団

令和四年度　事業報告

事業の状況

コロナ禍のもとでの財団運営も三年目を迎えたが、当初の事業計画通り、新村出賞等の選考と重山文庫の運営という財団の活動の軸となる二つの事業を、滞りなく行うことができた。

役員の異動について、理事では木田章義、佐藤昭裕、鈴木泰の三氏が二年間の任期を了え、重任された。また任期中であった真田信治氏が逝去された。代表理事には木田章義氏が選定された。

評議員では、木部暢子氏があらたに選任された。（以上は令和四年度中の異動についての報告である。その後の異動に基づく現在の役員・評議員の一覧は本『財団報』末尾に掲載している。）

一、重山文庫の公開

令和四年度も研究者ならびに見学者に重山文庫を公開した。開館日は毎週月曜日および金曜日で、開館時間は午前十時から十二時、午後一時から四時である。

本年度の来館者は、図書、書簡等の資料の閲覧を目的とする研究者と一般の見学者とを合わせて一一一名であった。

また茨木市立川端康成文学館で四月十一日から六月三日にかけて行われた「川端康成没後五十年特別企画展『古都をかける川端康成』」における展示のため、新村博士自作の『古都』スクラップ帳」を貸し出した。

二、新村出賞・研究奨励賞・刊行助成金の贈呈

第四十一回新村出賞・第四十回新村出研究奨励賞・令和四年度新村出刊行助成金の応募者数は新村出賞二件、研究奨励賞六件、刊行助成金一件であった。選考委員会は二回（七月三十日、十月二十二日）開かれ、次の通り各賞の受賞者を決定した。

○新村出賞　該当者なし

○研究奨励賞〔副賞六〇万円〕

安達真弓氏　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教

《本国ベトナム語の空間・談話ダイクシス研究　及び在日ベトナム系コミュニティにおける社会言語学的研究》

・“Vietnamese: From refugee community to cultural transitions,” John C. Maher (ed.), *Language Communities in Japan*, Oxford University Press, pp. 138–146, 2022.

・『ベトナム語空間ダイクシスとその展開―指示詞から文末詞・感動詞へ』（勉誠出版、二五二頁、二〇二一年）

黒川茉莉氏　上智大学大学院文学研究科博士後期課程院生

《イベリア半島文典類に遡及する、キリシタン版日本語文典の研究》

・「実践編 6.5. 天草版ラテン文典―イエズス会標準ラテン文法の日本語対応版」（『キリシタン語学入門』岸本恵実・白井純（編）、八木書店、二〇二二年）

・「用例翻訳の疎密に見るキリシタン日本語文典の性格」（『論究日本近代語』第二集、日本近代語研究会（編）、勉誠出版、

二〇二二年）

・「ロドリゲス『日本大文典』の品詞 particula と artigo に就いて」（『訓点語と訓点資料』第一四五輯、訓点語学会、二〇二〇年）

三好伸芳氏　武蔵野大学文学部専任講師

《日本語における述語と補部の相互作用に関する研究》

・『述語と名詞句の相互関係から見た日本語連体修飾構造』（ひつじ書房、二〇二一年）

・「連体修飾要素の解釈と述語のタイプ」（『日本語文法』二十巻一号、日本語文法学会、二〇二〇年三月）

・「叙想的テンスの意味と統語」（竹沢幸一・本間伸輔・田川拓海・石田尊・松岡幹就・島田雅晴（編）『日本語統語論研究の広がり―記述と理論の往還』くろしお出版、二〇一九年）

○新村出刊行助成金　該当者なし

贈呈式は京都ガーデンパレスにて、令和四年十一月二十三日（祝）に開催し、賞状と副賞を贈呈した。なお、受賞者には『新村出全集別巻』ならびに『新村出記念財団設立三十五周年記念論文集』を一冊ずつ贈呈した。

三、公開講演会（於 京都ガーデンパレス）

令和四年十一月二十三日、新村恭氏（新村出記念財団嘱託職員）が「『広辞苑』の裏面史―人と出版社の織りなす物語」と題して講演した。（後掲）。

四、年報の刊行

『一般財団法人新村出記念財団報』三十六号を刊行した。令和三年度に行った財団の諸事業などを紹介した。

訃報

平成五年度以来当財団の評議員、監事を務められ、令和一年度からは理事の職にあった真田信治氏（大阪大学名誉教授）は、未だ任期中の令和四年十一月十三日に逝去されました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

雑報

受贈資料

・工藤陽子氏より新村出博士から角田文衛氏に宛てた葉書一通を寄贈いただいた。（令和四年七月）

・長田俊樹氏より新村出博士から長田夏樹氏に宛てた葉書二通を寄贈いただいた。（令和四年八月）

受贈図書

次の図書、雑誌を寄贈いただいた。

・平山久雄『中古音講義』汲古書院（二〇二二年）

・『類型学研究　第6号　山口巖先生追悼号』類型学研究会（二〇二二年）

・『岐阜聖徳学園大学　国語国文学』四十一号、岐阜聖徳学園大学国語国文学会（二〇二二年）

・『和洋國文研究』五十七号、和洋女子大学日本文学文化学会（二〇二二年）

・『三重大学　日本語学文学』三十三号、三重大学日本語日本文学研究室（二〇二二年）

・『イソップ資料』十四号、イソップ資料研究室（二〇二二年）

・『相模国文』五十号、相模女子大学国文研究会（二〇二三年）

・『令和四年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集』（代表石塚晴通）（二〇二三年）

本年度新村出賞等受賞者の挨拶

新村出研究奨励賞

受賞の御礼

安達真弓

この度は、新村出研究奨励賞を授与いただき、大変光栄に存じます。まず、本賞の審査員の先生方、新村出記念財団の皆様、そして、私が普段愛用している『広辞苑』の編者であり、出身校の大先輩でもいらっしゃいます新村出先生に御礼申し上げます。また、この栄えある賞を受賞できましたのは、私の研究を日頃より応援してくださっている多くの方々のお蔭です。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

私は現在、本国ベトナムで話されているベトナム語の指示詞についての記述言語学的な研究と、移民によって日本で話されているベトナム語についての社会言語学的研究の二つをテーマとして研究を進めております。記述言語学と社会言語学を同時に研究するようになりましたのは、大学院時代の指導教員でいらっしゃった林徹先生の研究スタイルから大きく影響を受けたことによります。指示詞の研究と移民の言語の研究、その両方の楽しさをご教示くださった林先生に感謝いたします。

提出業績の一つである拙著『ベトナム語空間ダイクシスとその展開』は、私の博士論文を基にした論考です。本書の出版をご支援くださった東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所のLingDy3プロジェクトおよびDDDLingプロジェクト、そして本書の出版をお引き受けくださった勉誠出版に感謝申し上げます。「ダイクシス表現」とは、「その解釈に言語外の文脈情報を必須とする言語的表現」のことです。その例として本書は、「これ」「それ」「あれ」のような指示詞を取り上げました。ベトナム語で指示詞「それ」と感動詞「ほら」、さらに文末詞「～よ」に当たるものは、みな同じ形をしています。本書ではこのような現象について扱い、自然談話などのデータを分析しつつ、それぞれの要素の共通点と相違点を整理した上で、同心円が重なった包含を許すモデルを用いて統一的な原理に

基づいた説明を行うことを試みました。しかしながら、その歴史的な展開の細部についての考証には、解決すべき課題がまだ多く残っています。ハノイ留学以降十年来の言語コンサルタントであるグエン・ズオン・リュウ先生から教えていただいたベトナム語のことわざの一つに、このようなものがあります―大波も強風も、ベトナム語の文法の難しさには匹敵しない―。知れば知るほど難しく感じるベトナム語文法ですが、今後もその謎に挑み続けたいと考えています。

私のもう一つの研究テーマ、社会言語学の方も、多くの方々に支えられてきました。*Language Communities in Japan* の第十三章の執筆をお任せくださったジョン・C・マーハ先生をはじめ、共同研究プロジェクトである「東京移民言語フォーラム」および「移民の継承語とエスニックアイデンティティに関する社会言語学的研究」のメンバーの皆様、そして、長年私のフィールドワークを受け入れてくださっているボランティア団体の方々にお礼申し上げます。

これまでお世話になった皆様方に少しでも御恩返しできるよう、そして、ベトナム語学の発展にも寄与できるよう、今後も記述言語学と社会言語学の接点の探求に精進してまいります。具体的には、言語接触状況下におけるダイクシス表現の変容とその過程を追い、その際、個人での研究に加え、共同研究も推進してまいりたいと考えております。この度は、誠にありがとうございました。

（あだち　まゆみ）

受賞の御礼
――新村出先生の足跡を辿って

黒川茉莉

この度は、新村出研究奨励賞を賜り、誠に光栄に存じます。キリシタン版研究にも深く関わられた新村出先生のお名前を冠する賞であり、キリシタン語学の先達も受賞なさっている賞を賜ったこと、大変身の引き締まる思いが致します。選考に携わられた先生方、新村出記念財団関係者の皆様に心より御礼申し上げます。とりわけキリシタン語学という研究分野に私を導いて下さった豊島正之先生、上智大学国文学科の先生方、そして、キリシタン語学研究会にてお世話になっている先生方にも深く感謝を申し上げたいと思います。

フランシスコ・ザビエル来日以降のキリシタン時代に、キリスト教宣教会の一つである、イエズス会は宣教師の日本語学習の手助けとなる様に、数々の日本語研究書を刊行しました。これらの書は既に、中世時代末から江戸時代初期の日本語に就いての貴重な情報源として著名です。しかし、キリシタン版の日本語文典の成立に、当時のラテン語・スペイン語・ポルトガル語などの文法書が影響を与えたことは当然の前提とはされているものの、外国語の原典が具体的に日本語文典のどこに影響を与えているのか、日本語文典の術語の用法は、原典での用法と共通と見てよいのか、など詳しく見て行くと、まだ分からないことが少なくありません。

今回、賞を賜りました研究は、キリシタン版日本語文典を、その原典となったイベリア半島系文法書と術語・文法の構成などで対照して、精査する過程で発表したものです。

ジョアン・ロドリゲスの『日本大文典』は、当時のイエズス会のラテン語標準文法とされたマヌエル・アルバレスの文典の伝統的な八つの品詞分類を拡張し、artigo と particula という二つの品詞を加え、十に分類します。但し、この二つの品詞の差異や、それらを追加した理由は、明確にはされてきませんでした。私は、ロドリゲスが新しい品詞 artigo を加えたのは、日本語の「準体」現象を組織的に論ずる為であると考え、ポルトガル語の関係代名詞が、たまたまポルトガル語の定冠詞（artigo）と同形であるというポルトガル語特

有の現象が、日本語の「準体・準体助詞」の説明に適していた為であると結論付けました。このように、私は、日本イエズス会の文法家たちが、ラテン語文法とは大きく異なる特徴を持つ日本語文法を記述する際に生じた問題を、どのように乗り越えようとしてきたかに就いて、検討して参りました。

二〇二二年十一月初旬に、英国（ロンドン）の大英図書館で、新村出先生も過去に原本を調査された天草版『平家物語・イソポ物語・金句集』を閲覧する機会に恵まれました。大英図書館の広場には、ニュートンの巨大な銅像がありました。ニュートンは、「巨人の肩に立てばこそ、更に遠くが見渡せる」という言葉でも有名ですが、図書館に通い続けた数日間、偉大な先達が積み重ねられた数々の研究成果がなければ、私がここに来て、篤と貴重書に向き合うことも叶わなかっただろうと、しみじみと学恩を思いました。

今回の受賞を励みに、引き続きキリシタン日本語文典へのイベリア半島文法書からの影響を検証しながら、今後は、キリシタン日本語文典の文法規範の、キリシタン版の文学書や教義書への反映、そして、キリシタン語学書への中世芸能伝書類の影響など、更に自らの研究の視野を広げ、より一層研究に邁進して参りたいと存じます。　（くろかわ　まり）

受賞に際しての御礼

三好伸芳

この度、新村出研究奨励賞という栄誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。審査をご担当くださった選考委員会の皆様、ならびに財団関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。また、私を研究者として導いてくださった大妻女子大学の天野みどり先生、筑波大学の橋本修先生にも、この場を借りてこれまでの学恩に御礼を申し上げたいと思います。

私が新村出賞・新村出研究奨励賞の存在を知ったのは、大学院に入って間もない頃のことです。まともな論文すら書いたことのない当時の私にとって、新村出研究奨励賞はまだ「雲の上の賞」という印象で、この先自分自身がこのような賞に応募することすら想像もしておりませんでした。今回、そのような遠くから眺めていた賞をいただいたことに、大きな喜びを新たにしております。

今回受賞の対象となりましたのは、私がこれまで取り組んでまいりました日本語における述語と補部の相互作用に関する研究です。この研究テーマに取り組んだ背景には、連体修飾要素が、どのような環境においてどのような意味機能を持つのかという興味がありました。例えば「教室で勉強している太郎を思い浮かべた」のような例について考えてみます。この例が興味深いのは、「太郎」のような個体を表す名詞が「いつもはだらしないが、教室で勉強している太郎を思い浮かべた」のように、意味的に限定されていると考えられているということです。一方で、こういった意味的な限定はどのような環境においても生じるわけではなく、「教室で勉強している太郎を呼び出した」のような例の場合には、「いつもの太郎ではなく、教室にいる太郎を呼び出した」のような解釈が困難です。このような、個体を限定する働きを持つ連体修飾要素がどのような機能を持っているかという点は、これまで十分に議論されてきませんでした。また、先ほどの例は、主節述語「思い浮かべる／呼び出す」においてのみ対立を持っていますが、このような述語の意味的な対立についても、十分な議論がなされてきませんでした。以上のような問題意識のもと、述語とその補部、つまり補語となった名詞句や連体修飾要素の相互関係について分析を進め、一定の見通しを立てることができたのではないかと考えております。

しかしながら、これから考えてみたいテーマも多く残されており、研究者としての歩み

はまだ道半ばです。あるいは、ようやく端緒についたというほうがより正確かもしれません。新村出先生という偉大な研究者の名を冠する賞をいただいたことを励みに、今後も一層研究に精励し、研究者として研鑽を重ねてまいりたく存じます。（みよし　のぶよし）

資料紹介

重山博士の和紙研究

吉野政治

文献調査に基づく和紙の歴史的研究は、昭和十一年に発足した重山新村博士を代表とする和紙研究会によって本格的に始まったと言える。

会の機関誌『和紙談叢』は昭和十二年二月に発行されたが、編集兼印刷人奥本正人の事情によって一号のみで廃刊となり、『和紙研究』と名を変えて昭和十四年一月に第一号が発行されることになった。昭和二十六年十二月発行の第十五号で終刊したが、博士没後に再刊され、昭和五十九年十一月発行の第十七号まで続いた。

1

重山博士の和紙研究のほとんどは、この会の機関誌に発表されている。『新村出全集』第九巻「和紙研究篇」に収められているものを内容によって分類すれば、次のようになる。

和紙外聞

和紙外聞抄　『和紙談叢』（昭和十二年二月）

和紙覚書　『和紙研究』第一号（昭和十四年一月）

＊「和紙外聞抄」の補足

和紙自讃他讃　『和紙研究』第十五号（昭和二十六年十二月）

文学における和紙

紙漉の歌　『創作』（昭和十二年七月）

＊後『橿』に収録

和紙覚書（二）『和紙研究』第二号（昭和十四年四月）

＊江戸文学に見える和紙の紹介。後「俳句と吉野紙など」と改題し『橿』に収録

和紙の歌など　『和紙研究』第十三号（昭和二十三年九月）

地方紙とその歴史

和紙覚書（三）『和紙研究』第三号（昭和十四年八月）

＊後「吉野の国栖紙」と改題し『橿』に収録

和紙覚書（四）『和紙研究』第四号（昭和十四年十二月）

＊関口隆吉「御用紙一件」を美濃紙史料として紹介したもの

和紙覚書（五）『和紙研究』第五号（昭和十五年四月）

＊吉野紙について書いたもの

和紙覚書（六）『和紙研究』第六号（昭和十五年七月）

＊「和紙覚書（四）」の補足

杉原紙源流考（上）『和紙研究』第七号（昭和十五年十一月）

越後の小国紙　『和紙研究』第十四号（昭和二十六年一月）

その他

堀部正二著「椙原紙箚記」跋　『和紙研究』第十二号（昭和二十年一月）

中山琇静著『名塩紙』序文（昭和二十二年九月）

小葉田淳著『岡本村史』序文（昭和三十一年九月）

2

ところで、柳宗悦は自著『和紙の美』（昭和十八年刊）のために書き下ろされた「和紙十年」の中で次のように書いている。文中「この号」とあるのは、柳の主宰した民芸運動の機関誌『工藝』の、小川紙（細川紙）を特輯した五十九号（昭和十年十一月発行）のことである。

この号も前述の第二十八号と共に、和紙を紹介した画期的な出版となった。後年『和紙研究』の如き雑誌が出たのも、これらの『工藝』に刺激されることが大きかったと思える。

確かに和紙研究会の発足と『和紙談叢』『和紙研究』の発刊は、『工藝』の和紙特輯号の二冊が刺激を与えたようである。しかし、重山博士の文献による和紙に関する研究は和紙研究会が発足する前から始められていた。しかしまた、それもまた柳の『工藝』によって思い立たれたものであったようである。

重山文庫に所蔵されている『工藝』で最も古いのは第十号（昭和六年十月発行）である。この号は「山陰の新工芸品紹介の特集号」であり、口絵には四種の因幡紙と広瀬絣と因州木綿の実物が貼られ、安木の皿立・刳盆・垢取、塩冶の団扇、鳥取の錠、牛の戸の壺・茶碗・飯碗・皿、喜阿弥の蓋物、袖師の土瓶、布志名の燗徳利、湯町の鉢、母里の皿の写真等が載せられている。また、論文には永松清一郎「古代因幡紙の再興」、太田直行「地方工芸の将来」、吉田璋也「因幡の民芸品試作」、柳宗悦「民芸と摸倣」、森永重治「広瀬絣」、河井寛次郎「山陰の窯」、太田直行「喜阿弥の窯」、柳宗悦「美の標準」が収められている。因幡紙については柳の解説がある。すなわち、この号は特に和紙だけを採りあげたものではないが、重山博士は和紙について特に注目したようであり、冊子の背に「工藝　十　紙のこと　因州のかみ」と手書きしている。

重山文庫所蔵の『工藝』で第十号に次いで古いのは前出の「和紙特輯号」の二十八号である。口絵には島根の和紙実物十八種の実物（一枚は紙布）が貼付され、それぞれについての柳の「挿絵小解」があり、また写真九枚を挿入した和紙製作の「工程図解」がある。論文は太田直行「雲石紙考」、中村和「和紙の特徴と島根の紙」、柳宗悦「和紙の美」、寿岳文章「和紙復興」、中村直勝「和紙の二三」、内藤虎次郎「和紙のはなし」の六つの論考が収められている。重山博士はこの冊子の背にも「工藝　三十八　紙のこと　雲州石州のかみ」と手書きしており、裏見返しの遊び紙には次のように鉛筆の走り書きがある。

此の書きのふ神田南神保町にてもとめ、けふ箱根の山中より富士の裾野かけて汽車疾走せる間に一わたりよみをはりぬ。わかきころ駿河半紙をつかひしことなどおもひおこし、その紙いまはいかになりゆきたると考へめぐらしつゝ
昭和八年五月二日　つばめ号にて　新村　出

重山博士は『工藝』の定期購読者ではなかった。博士がこれらの号を購入し、手許に残したのは、和紙に対する郷愁を感じ、広く和紙について調査してみようという思いが生まれたからではなかろうか。後に「和紙についての研究雑誌を作って見たい」という奥本正人の願いに対して尽力を約し、和紙研究会の代表者となったのは、こうした背景もあったようである。

3

寿岳文章は柳の『工藝』の編集に深く関わり、重山博士と共に和紙研究会の立ち上げにも関わり、『和紙談叢』『和紙研究』の編集にも関わったが、重山博士と寿岳との往復書簡には和紙研究会発足以前の重山博士の和紙への関心の高さが窺える話題が散見する。

次に昭和十一年の寿岳文章宛新村出書簡か

らいくつか抜粋して紹介するが、最初の三通は『工藝』五十九号に特輯された小川紙についての話題である。

二月十六日付

昨日は御来訪さま〴〵のおはなしも出来何より喜ばしく存候。本日街かどで『工藝』五十九号、小川紙の一冊手に入り、一夜のたのしみによみをはり申候。感興裨益共に著しかりしこと、御指示のたまものに候。書志も相当役に立ち可申存候。岩国紙の方は昨今はもはや衰頽して更生の道も指揮の価もなきにや如何。

二月二十二日付

（前略）なほ『工藝』の次号あたりに紙に関する小文章かゝせてもらふこと出来可申や如何。研究にはあらで報告にすぎざるものに候ど。

＊この重山博士の希望はかなえられなかったようであるが、「報告」というのは『工藝』第十号掲載の柳の文章に触発されたもので、後の重山博士の「和紙外聞抄」に書かれた内容のようなものであろうか。あるいは、小川紙に関することであろうか。もしそうであれば、次の三月三十一日付書簡に書かれたような内容であろう。

三月三十一日付

（前略）次に武蔵小川紙のこと、新編武蔵国風土記（稿）に出でをり候こと申上候が、次々の『工藝』の誌上において可然御補充置如何かと存ず。新編武蔵国風土記〈二百六十五巻（写本旧幕府編纂）は明治十七年和装八十冊本（新編武蔵国風土記稿）存。昭和再刊の大日本地誌大系本（数冊）あり。原本は旧幕府本より引継ぎて内閣文庫本あり。左の巻々に於て、小川紙及同系の造紙のこと散見いたしをり候。

巻二四六（秩父郡之一）〈洋装、昭和本、７５丁―７６丁。和装、明治本８丁〉槻川

巻二四九（秩父郡之四）（中略）

巻二五〇（秩父郡之五）（中略）

なほ巻一（総国図説）（中略）

而して、あちこちの風景画、風俗画（紙すきに関して）もみえ、古雅に存候。もし原本（内閣文庫の原本によりて）より、原図を撮影又は複製模して『工藝』上に載せられ候はゞ甚だ面白からんかと存候。明治初刊本、昭和再刊本の挿画は甚だまづきやうに存候へば此の際是非原本よりと希はれ候。――ともかくも小川紙の盛時にあたれる文化文政年代の編纂にかゝる右風土記所載の事項は是非補充せられ候やうに切望に不堪候。

小生別に抄録いたしあるもの控へをれども原本によりてさしゑを加へられねば、点睛を欠くの憾あるべく候。

また、次の書簡に見える寿岳からの「造紙史研究のプラン」は、やがて発足する和紙研究会と関わるものと思われる。

五月七日付

（前略）造紙史研究のプラン一応承はり申候。二十日すぎには新緑感賞がてら参上のつもりに候へば、其節再び御相談可申候。此の書箋は信州の人より贈られしものに候。麻積紙（東筑摩郡北部、始槍山のうしろにあたるか）とか申しをり候。例の歴史地理五月号に中篇として続稿出てをり候稿者は東京帝大の史料編纂所在勤の人といへば、成るほどとうなづかれ申候。

＊「歴史地理五月号に中篇として続稿出てをり候」云々というのは小野晃嗣著「中世に於ける製紙業と紙工業」という論文のことである。この小野論文により、播磨国杉原谷を杉原紙の原産地とする重山博士の説は固まったようである。

公開講演

『広辞苑』の裏面史
―人と出版社の織りなす物語

新村　恭

『広辞苑』の編者新村出は、実父関口隆吉（たかよし）（関口家次男）の次男。その次男新村猛の次男の新村恭（やすし）です。話は『広辞苑』の内容の細部には関わらず、もっぱら人と出版社の関係です。新村家と『広辞苑』の物語でもあります。

日本の国語辞典編纂は、大槻文彦・松井簡治の血のにじむ個人的努力から始まり、現在は出版社の力によるところが大きくなっています。新村出の『辭苑』『広辞苑』は過渡的・中間的形態と言えます。前提として、この歴史的流れをおさえることが大切と思います。

一　新村出の国語辞典編纂の始まり
―生みの親は出版人

岡書院の岡茂雄が新村の主著の一つ『東亜語源志』（昭和五年）を刊行後、家庭向けの国語辞典編纂を要請。新村は「そのようなものには興味をもたない」と断ったが、執拗な要請に折れ、東京高師時代の教え子で国語副読本の教材などをいっしょに手がけていた、元舞鶴女子高教頭の溝江八男太（やおた）の協力があればとの条件で受諾。溝江の百科項目を含めるという提案を容れて編纂が始まった。能勢朝次ら東京高師出身者がスタッフとして集められた。

岡は一人出版社の自分のところでは手に余ると思い、同郷長野県出身の岩波茂雄に依頼したが断られ、渋沢敬三の仲介で博文館（戦前の代表的出版社）に引き受けてもらうことになる。その際、新村は「岡君に頼まれてやむなく引き受けたのだから…少なくとも印税の半分は岡君が受けることを条件」として受諾した。岡は実務・進行管理、博文館との折衝役を務めた。

新村財団には「京都市上京區小山中溝町十九　新村出様／東京市日本橋區本町　博文館辭典編纂部　溝江八男太」と印刷された葉書を含め、溝江の新村宛書簡は九二通のこり、岡の新村宛は五八通のこっている。新村から溝江宛の書簡は博文館が空襲で全焼したためのこっていない。百科項目については、アーネスト・サトウの子息、武田久吉（植物学者、理学博士）が協力した。

二　『辭苑』の刊行、改訂作業に次男猛が参画

新村出命名の『辭苑』・昭和一〇年（一九三五）二月刊行、一六万項目収録、A5判四段組で図版も多い（『広辞苑』もほぼ同様の体裁）。新村は「跋」の末尾に「終りに臨んで、この『辭苑』の誕生計画が、篤厚なる士の犠牲的精神に負ふことの多大なるものがあるに拠ることを、特に附記して衷心より深謝の意を表する」と岡のことを記している。

昭和一三年には、溝江の手によって『辭苑』から百科項目を除いて簡略化した『言苑』が博文館から刊行された（印税は、新村・溝江・岡で三等分）。戦後初期の学習用小型国語辞典のもととなる。

しばらく後、「博文館のためにこれ以上仕事をすることは気が進まない」と渋る新村を岡が説得し、改訂作業が始まった。岡は百科項目の検討を進めるとともに、治安維持法違反のかどで勾留され、執行猶予つきで釈放されたが、失職していた次男の新村猛（仏文学者）に外来語の担当を依頼した。

猛は外来語の担当をこえて、上田萬年・松井簡治共著『大日本國語辭典』の孫引きが多いことなど不備を感じ、息子の特権を活かして改訂作業に全面的に介入した。個人的に阪倉篤義に協力を要請もした。改訂版が刊行できないまま戦局は深まり、東京への空襲で博文館、共同印刷は全焼し、原稿や確保していた用紙、紙型などが失われた。かろうじて残った校正刷を猛がトランクに入れ、空襲警報が

出ると東海道線が止まるなか、親戚等の家を転々としながら京都に帰って終戦を迎える。

三　岩波書店が引き継ぎ、『広辞苑』刊行

博文館は傘下に共同印刷、広告代理店（博報堂の前身）、日本書籍（教科書会社）、東京堂（取次、本の卸売り業）などをおさめており、南方植民地に投資もしていた。占領軍の財閥解体、戦争責任追及の施策を恐れて、自ら小出版社のみに解体したため、『辞苑』改訂版の刊行ができなくなった。そこで、新村猛は病気療養中の岩波茂雄の鎌倉の家に単身乗り込み、引き継いでもらうことの諒承をとりつけた。新村家が改訂作業のために博文館に借りていた費用は岩波が立て替えることになった（新村家が編纂・改訂のためにスタッフを雇用する費用等として、印税を前借りするかたちは『広辞苑』第三版まで続いた）。

昭和二三年（一九四八）九月、岩波と新村出・猛の協力のもと、冨山房で『大日本國語辞典』を担当したことがある国文学者の市村宏をチーフに一〇人ほどのスタッフが集められ、新村出国語辞典編纂室が岩波書店内に設けられ、活動が始まった。各分野の一流研究者に百科項目原稿執筆が要請された。新村出からスタッフ宛に厖大な数の指示書も送られた（その一部は、『新村出全集』第十五巻書簡篇の市村宏宛書簡に収録、また『財団報』三六号に紹介）。

出版社との折衝役は岡茂雄から新村猛に代わり、岡の印税著作権は消滅した。理想主義者の猛は、スタッフの給料を当時高水準だった岩波のものに準じて支払った。スタッフに日本共産党中央委員の夫人がおり、ＧＨＱの尾行・監視がついたため、一時期編纂室は新宿区四谷に移るという事態もあった。

編者側から岩波に原稿が渡り、昭和二八年からゲラが出始める。この段階で、大野晋から岩波を通じて、基礎語の解説が不十分との意見があり、補正もなされた。スタッフからは、大野晋には新村家から顧問料が支払われていたのになぜ今との声があった。岩波は多くの社員を熱海の岩波家別荘に泊まり込ませて修訂・校正に大奮闘したことは、ＮＨＫの「プロジェクトＸ」で放映されもした。ただ、この番組は前身の『辞苑』のことが全く触れられてないなど、岩波の意向が強く反映されており、脚色も少なくない。

書名も「辞海」「新辞苑」から、直前に『広辞苑』に決まった。昭和三〇年五月二五日初版刊行。二〇万項目収録。初版にしか収載されてない新村出の「後記」が難産であった経過をよく表している。少し長いが一部を引用する。

……〔辞苑の〕校正刷がある以上、改修の事業は比較的簡単に進め得るものと我も人も思考したが、その予想は甚だ甘かった。戦塵の静まりゆくにつれて、日本は一大転換を開始して居たのである。即ち昨日まで国を動かす大きな原動力であった陸海軍は廃止され、日本国憲法は発布せられた。この憲法の改正を軸として、法律は無論、文物制度のあらゆるものがめまぐるしく改廃され、創建されて行った。民主化への巨大な歩みは、古いもの一切の存続を拒むごとき世相を展開した。この事は辞典編纂の上に細大となく影響する。嘗ての重要項目は今は多く削除すべきものとなり、或は評価が急変して増補又は縮小を余儀なくされた。存続すべき項目に対しても、その見方が著しく違ってきた。加之（しかのみならず）、新たに採るべき項目は日に月に続出し、応接に暇なからしめると共に、忽ち現れ忽ち消え去る社会百般の事象が編集部を困惑せしめたのも、混乱期の自然なる姿であった。兵を廃した国に警察予備隊ができ、これが忽ちにして保安隊と変り、三転して自衛隊となる。編集部はその都度、前稿を捨てて新稿を草するのである。この辞典が単純な国語辞典ではなく、百科の語彙、固有名詞をも収録してあまさぬものであるだけに、かかる現象から被むる編纂上の困難は当初の予想を裏切ってこれを数倍化した。

困難はそれのみには止まらなかった。新事項は遠慮なく発生するが、これを正確に解説する資料とすべきものは、これに伴っては出て来ない。否、編集部開設の当初には、新項目採集に使用する新聞などの入手すらできなかった。紙がない、鉛がない―資料の欠乏が新資料の出現を固く阻んで居たのである。……

末尾には「更に個人的にではあったが、この事業の前後を通じてなにくれとなく編者の相談相手となり、不断の友情を表せられた岡茂雄氏に本辞典の成るを告げて、その喜びを頒ちたい」とある。

苦労の末ではあるが、戦後早い時期、混沌とした時代に大きなステイタスを確立したことが、後々までの力となった。

四　新村出逝去、第二版刊行―紛議から協同へ

初版刊行一年後、新村出は依頼にこたえて、率直な感想を記し、誤植が多いことや「先行辞書からの孫引による失敗」とともに、物理学の用語の適切周到をほめられたことなどなど、「きょほうへん五分五分」としている。

新村出は、長男秀一（ひでかず）の京都市立紫野高校の同僚国語科教師の東辻保和（ひがしつじやすかず）に定期的に「来勤」してもらい、改訂の検討をするとともに、若い研究者に、それぞれの専門分野の項目についてのアドバイスを求めた。努力は継続したが、昭和三九年（一九六四）春には東辻は高知大学に転出した。同年七月には岩波書店の吉野源三郎、長田幹雄らが来て、編集進行や条件改修を提案。新村出は、長男秀一、次男猛を同席させて受諾した。同一〇月には満八八歳になった。

第二版は岩波を中心にして進められた。初版の項目を一点ずつ用紙に貼付し、手を入れた原稿が岩波に残っている（ＮＨＫの「プロジェクトＸ」では初版の原稿のごとく見せられた）。編者遺族側のかかわりは限定的であった。昭和四二年八月新村出歿、少し後の同四四年五月に第二版は刊行され、序文は新村猛が書いた。「編者側は、語源語誌及び外来語を分担し、その他の国語項目と百科項目とのすべては書店が中心となり、百余名の専門学者の協力を仰ぐこととなった」とあり、実務的で意気軒昂の感はないものであった。が、評判高く売れ行きはたいへん良好だった。

新村出歿後一年九か月後に出版された第二版、後をどうするか、ここが大きな分岐点であった。

岩波書店はどう考えたか。新村出の長男秀一は病のため父の葬儀に姿を見せられず、昭和四四年一二月に亡くなった。次男猛は国語学者ではない。刊行している超ロングセラーの大学のテキストブックは著者が亡くなった後、弟子が補訂して版を改めることは行われている。したがって、有力国語学者を立てて後事を委ねることを考えるのは自然なことであった。新村家に支える力があるかという想いもあったろう。前述のように、大野晋は新村家から顧問料をもらっていたにもかかわらず、原稿入稿後、岩波を通じて問題を指摘した。後釜を狙っていたと思わせることである。市村宏の新村猛宛の岩波書店内の動向を伝える書簡のなかには、岩波側に大野晋を立てる動きがあったことが窺われるものがある。

一方、猛は第二版に不満だった。孫引きが多いことなど不備があることを認識していたためもあるが、責任を持つべき編者として十分に参画できない体制であったこと、「亡父」の語源語誌説が相対化されていたことなどがある。

岩波の辞典部長・秋田弘と新村猛は、それぞれ考え、想いをメディアに出したりもした。かくて岩波書店と新村猛は不和となり、ために『新村出全集』は筑摩書房から出版されることになった（全一五巻、昭和四六～四八年）。

確執があったものの、岩波も『辞苑』から『広辞苑』まで、新村出とともに刊行を担ってきた、著作権者の猛の意向を無視して進むことはできず、和解して「第二版補訂版」を

つくることになった。編者側は、第二版でも改訂に加わった国語学者の金岡孝名古屋大学文学部教授を中心に東海地方の研究者、事務スタッフで体制をつくり、猛の長男・徹、次男・恭も参画した。岩波側は後任の西川辞典部長と数人の社員が担当した。

補訂版では、アフリカ・中東を重視すること、差別語の見直し等が課題とされた。アフリカ・中東は編者の人脈で研究者に依頼し、近世を中心とする差別語は岩波が進めた。改版ではないにもかかわらず、かなりの項目が追加され、修訂が施された。岩波書店は特別に「第二版補訂版」として売り出した（昭和五一年一二月）。なぜ第二版だけ「補訂版」があるのか、以上の経緯によるものである。

五　第三版から第四版へ

第三版へ向けての体制づくりは、補訂版作成と併行して進められた。新村出遺著刊行会として、金岡孝中心のスタッフを補強し、名古屋の新村猛宅の離れを恒常的な編集室として改訂作業を行った。長男新村徹も本格的に参画した。岩波の担当者、西川秀男、水野清三郎、禰寝（ねじめ）雅子らと名古屋の旅館等でしばしば会議を持った。

第三版改訂作業の校正刷、カード、一覧表などの一部は、現在、重山文庫で見学者のために展示している。大日本印刷で校正にコンピュータが導入されたものの、それは一般には全く普及しておらず、ために厖大な手書き資料が残った。用例見直しのカードや第二版の項目に『日本国語大辞典』『岩波国語辞典』『岩波古語辞典』の同項目を貼付、書き加えたものなどがあり、引きずっている孫引き解消、よりよい語釈、用例への意欲がうかがえる。

改訂作業が終盤にさしかかった昭和五六年（一九八一）五月、新村出遺著刊行会を継承・発展させて財団法人新村出記念財団が設立された（初代理事長新村猛）。設立の呼びかけ人には多くの著名研究者が名を連ね、理事・評議員は有力言語学者・国語学者を中心に構成された。ここには大野晋の名は一切無い。

岩波と財団の協同で広辞苑の「刊行委員会」を発足させてゴールに向かうこととなり、昭和五八年一二月に第三版は刊行された。増頁数二二一は、二～七版のなかで最も多い。阪倉篤義新村出記念財団理事長の「第三版の序」が経緯を記している。

……第二版の完成を前にして、新村出先生は逝去された。…爾後「広辞苑」修補のことは、「新村出遺著刊行会」（代表者、新村猛氏）と岩波書店辞典編集部とが協同して担当することとなった。

……「新村出遺著刊行会」は、これを発展的に解消して、わが国の国語学・言語学の発展に寄与するための助成事業等をも併せ行うための財団法人を設立しようとの、御遺族の総意による提唱があり、これが昭和五十六年五月、「新村出記念財団」の名称のもとに、文部大臣の認可を受けるに至った。「遺著刊行会」の仕事を全面的に継承することになったこの「財団」が、したがって、今後、「広辞苑」の編纂・修補の責任を負うことになったのである。具体的には、「財団」に「刊行委員会」を設置し、「財団」の委託を受けてその作業に当ることになった。

しかし、この「刊行委員会」が発足したとき、第三版編纂の作業は、新村猛氏を中心とする金岡孝氏その他のスタッフと、岩波書店辞典編集部との協同のもとに、数年に亘って着々進捗しつつあり、事実上その大半が完成されていた。「刊行委員会」は、むしろ、その成果をそのまま引き継ぐかたちになったことを、断っておかなければならない。

このように、新村出記念財団は『広辞苑』の「刊行委員会」を設置し、理事会の依嘱を受けて進めることになった。昭和六二年七月、「刊行委員会」の依嘱による「編集委員会」が岩波の担当者とともに第一回の会合を持ち、以後定期的に委員会が開催され、増刷時

の訂正箇所を確認等するとともに第四版刊行に向かった。財団の「編集委員会」のメンバーは、阪倉篤義（代表）、新村猛、山口明穂、鈴木英夫、小松寿雄、白藤禮幸とされる。阪倉篤義と新村猛は、第四版のゲラを「あ」から「ん」まで目を通した。

平成三年（一九九一）一一月『広辞苑』第四版刊行。新村猛は、次の年から摂食しない老衰状態が進行し、平成五年一〇月逝去した。葬儀の後、岩波書店辞典部長の西川秀男が棺に『広辞苑』第四版を入れて荼毘に付された後、『広辞苑』が形はそのまま、真っ白な状態で残っていた。新村家の『広辞苑』への直接的な深いかかわりは終焉となった。

第四版の後、新村出記念財団の役員が国語項目の元締めを務め、百科項目は岩波書店が担当するかたちで、全体として岩波書店の組織力に大きく依存した刊行となっている。『広辞苑』第五版平成一〇年（一九九八）一一月刊、第六版平成二〇年一月刊、第七版平成三〇年一月刊。

おわりに―『広辞苑』と新村出

生みの親の岡茂雄は、気の進まないのをおして依頼した負い目もあって、『広辞苑』が新村出の主要業績と見られてはいけない、脇道に咲いた小花としなければならないと述べていたが、どうだっただろう。新村出の一生を拙著によって振り返ってみよう。

言語学・国語学の高度体系化には進まず、書いたものも、初期の一部を除いて専門的なものはなく、多くが一般向きの随筆である。学風は歴史主義的であり、言葉がどのように使われてきたか、語源・語誌に興味をもつ。文献に広く通じ、博覧強記である。好奇心強く、興趣にのりやすい。図書館人として、一般読者のニーズを感受することができた。大学定年後、宮仕えは一切しなかった。広く文化を愛好した。教育の重要性を深く認識していた。敵をつくらない温厚な性格で、幅広い交友関係を持ち、年齢の上下をふくめて誰とでもフランクに質疑応答等することができた。大変筆まめであった。人間関係を大切にした。人がよく、熱心な要請を断るのが下手であった。「よきにはからえ」と人に任せることができる性格であった。現実のなかで柔軟な対応をするタイプであった。二人の息子を含めて、子孫、親類に愛情を注ぎ大切にした。……

このように見ると、望むと望まざるとにかかわらず、『広辞苑』はその生き方の結実と思える。そして、『広辞苑』は、定価の高さをふくめて考えると、戦後の圧倒的なベストセラーでもある。これを、新村出が咲かせた「大輪」と言わないわけにはいかないであろう。そして、その生みの親は岡茂雄だったのである。

現在は、電子化のためもあって、出版社は難しい状況にあります。『広辞苑』も、編者側とのよりよい協同で編纂力を増すことがが望まれているのではないでしょうか。振り返ってそのように思う次第です。

※参考文献

新村恭『広辞苑はなぜ生まれたか―新村出の生きた軌跡』（二〇一七年八月、世界思想社）
岡茂雄『本屋風情』（中公文庫、一九八三年九月、初版、平凡社、一九七四年七月）
新村猛『「広辞苑」物語―辞典の権威の背景』（芸術生活社、一九七〇年六月）
倉島長正『「国語」と「国語辞典」の時代（上・その歴史）』（小学館、一九九七年一一月）
今野真二『「広辞苑」を読む』（岩波新書、二〇一九年一二月）

役員・評議員名簿（令和五年六月現在）

役員名簿

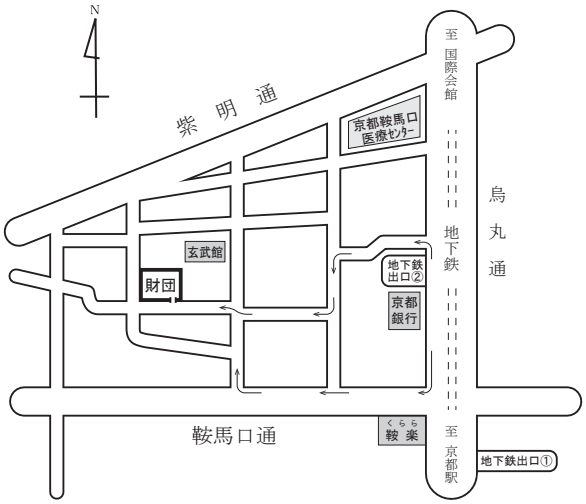
代表理事	木田章義	（国語学）京都大学名誉教授
業務執行理事	佐藤昭裕	（言語学）京都大学名誉教授
業務執行理事	吉野政治	（国語学）同志社女子大学名誉教授
理事	今西裕一郎	（国文学）九州大学、国文学研究資料館名誉教授
理事	鈴木　泰	（国語学）東京大学名誉教授
理事	水原有香子	行政書士
理事	山本　賢	岩波書店執行役員
理事	吉田和彦	（言語学）京都産業大学客員教授
監事	金　文京	（中国語学・中国文学）京都大学名誉教授

評議員名簿

評議員	浅野敏彦	（国語学）大阪成蹊短期大学名誉教授
評議員	今西典子	（言語学）東京大学名誉教授
評議員	大槻　信	（国語学）京都大学教授
評議員	木津祐子	（中国語学）京都大学教授
評議員	木部暢子	（国語学）人間文化研究機構機構長
評議員	玉村禎郎	（国語学）京都産業大学教授
評議員	由本陽子	（言語学）大阪大学名誉教授
評議員	吉田　豊	（言語学）京都大学名誉教授

重山文庫案内図

交通　京都駅から地下鉄鞍馬口駅まで約10分
地下鉄鞍馬口駅下車徒歩約5分



重山文庫開館日

開館日　月・金曜日（国民の祝日は休み）
開館時間　午前十時～十二時／午後一時～四時

新村出記念財団　重山文庫
電　　話　〇七五-四一一-九一〇〇
メールアドレス　s-chozan@cronos.ocn.ne.jp
ホームページURL　https://s-chozan.main.jp/